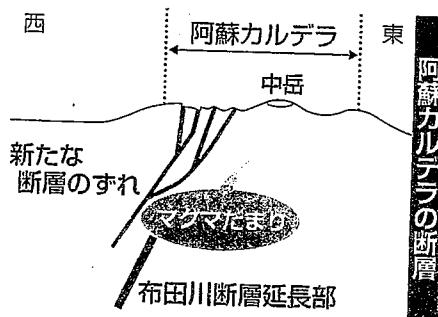


2016.10.21 京都新聞

2016年(平成28年)10月21日 金曜日



阿蘇カルデラ内に確認された地表の落ち込み。40~50㍍の幅で約9㌔続いている(7月17日、熊本県阿蘇市)=林教授提供



4月に起きた熊本地震で、阿蘇山の地下にあるマグマだまりが断層破壊の進行を妨げた可能性の高いことを、京都大理学研究科の林愛明教授らが明らかにした。阿蘇カルデラ内で新たな断層のずれも確認。従来とは異なるマグマの通り道ができる可能性があり、噴火の危険性を再認識する必要があるという。米科学誌サイエンスに21日、発表する。

断層破壊

マグマが妨げ

京大グループ阿蘇山調査 地殻に隙間

噴火リスク上昇も

10月8日の阿蘇山噴火について、林教授は熊本地震との関連は不明としつつ、「マグマ周辺に新たに地殻の隙間ができる可能性があり、噴火のリスクは高まっている」と指摘する。

(広瀬一隆)

グループは発生直後から半年かけ、震源域で地表の変化を測定したところ、阿蘇山から南西約40㍍にわたって地表がずれていることを確認した。布田川断層がカルデラ内まで延長していることが判明したほか、カルデラ西縁から北東方向に幅40~50㍍、長さ約9㌔にわたって地表が落ち込んでいることも分かった。

また、カルデラ外では横方向に断層がずれていたのにに対し、内部では上下方向にずれていた。カルデラの地下6㍍にあるマグマによって断層破壊が妨げられ、地殻の割れ方が変化したと考えられるという。

10月8日の阿蘇山噴火について、林教授は熊本地震との関連は不明としつつ、「マグマ周辺に新たに地殻の隙間ができる可能性があり、噴火のリスクは高まっている」と指